

令和5年度移動教育委員会 意見交換会 発言要旨
(県立松崎高等学校)

開催日時：令和5年9月4日（月）11時～14時

場 所：松崎高等学校

参 加 者：松崎高等学校職員、静岡県教育委員、才徳兼備の人づくり小委員会委員 など

1 施設及び授業見学

2 学校概要説明

(松崎高等学校 八代校長)

- 大正12年に松崎町立女子技芸学校として創立し、昭和24年に県立高等学校となった。昨年度創立100周年を迎え、10月に記念式典を開催する。
- バブル崩壊後、観光業の衰退により人口減少、少子化が進み、町の存続が危うくなったことをきっかけとして、平成20年度から連携型中高一貫教育を実施している。現在は、松崎中学校及び西伊豆中学校の2校と連携している。
- 1学年の定員は80人だが、生徒数は191人と各学年の定員を満たしていない。出身中学を見ると、約8割が連携校から進学している。
- 全日制普通科の高校で、「特進コース」「総合・進学コース」「美術コース」の3つのコースで教育活動を行っており、入学時にコースを選択する。3コースともに、ICTを活用した対話的・協働的な学びが活発に行われている。
- 「特進コース」は、4年制大学を目指す生徒のためのコースで、月曜7時間目の授業があり、夏休み期間や朝の補講があるほか、年間2回1日学習会を実施している。
- 「総合・進学コース」は、短大や専門学校あるいは就職を目指す生徒のためのコースで、多様な選択科目を用意している。進学希望者は英数国を中心に、就職希望者は家庭科目や看護・福祉、保育の科目などが選択できる。
- 「美術コース」は、美術系の4年制大学や専門学校への進学あるいは美術系の就職を目指す生徒のためのコースで、豊富な美術科目を選択できる。
- 特徴的な行事として、4月に棚田畦づくり、5月に林業体験、6月に双獅祭、7月に職業体験実習などがある。
- 連携型中高一貫教育の行事としては、6月に中高合同ソフトテニス大会、7月にデザイン教室や中学校出前授業などがある。8月には、小・中・高の児童生徒がゲームを通じて英語で交流するキッズイングリッシュを実施した。1月には中高交流勉強会があり、本校生徒が中学生の学習を支援している。
- 総合的な探究の時間を「西豆学（さいずがく）」と名付け、まず1年次で地域を知り、2年次では社会での役割を考える授業を展開している。1年次の棚田学習や林業体験もそ

の一環であり、2年次には、進路ガイダンスや企業訪問など進路について考える機会を設けている。「松崎町 2030 プロジェクト」とも連携しながら、町が目指す姿に対する課題解決について考えることを目標に取り組んでいる。

- 進路状況については、概ね6割が進学で4割が就職。進学のうち四年制大学が約2割、短期大学や専門学校が約4割。本校は静岡大学教育学部の地域指定枠入試があり、これを利用して6名が静岡大学に進学し、3名が卒業後静岡県の教員になった。
- 平成23年度から共生・共育が始まった。対面式や双獅祭、球技大会、ハロウィーンなど、主に行事を通して伊豆の国特別支援学校伊豆松崎分校との交流を行っている。また、生徒だけでなく、教員同士も研修や防災訓練を通じて交流を行っている
- 企業体験プログラムやアカデミックスクールに参加し、「地域に羽ばたく松高生」の育成に取り組んでいる。企業体験プログラムは、疑似会社を設立し商品を開発、投資家へのプレゼンを行い、販売後は収支決算を行うものである。地元の桜葉を生かした団子を考案し黒船祭で販売したところ、好評ですぐに完売した。アカデミックサマースクールでは、県立大学の学生や賀茂地区の高校生とフィールドワークやグループワークを行い、地域課題や地域の魅力をプレゼンした。

3 意見交換

教育委員

- 地域について考える上で、行政が描く将来像は非常に重要である。「松崎町 2023 プロジェクト」について話があったが、町は2030年の松崎町をどのように描いているのか。

松崎高校

- 「松崎町 2030 プロジェクト」は、松崎町が静岡大学とタッグを組み、2030年時点での町の目標を設定し、地域の方々を巻き込んで活動しているものである。細かな目標は町と静岡大学で設定しているが、若者の意見として高校生の意見も反映している。実際の活動としては、地域資源の利活用であったり、農や漁、エネルギー資源、高齢化など地域が抱えている問題に対して、有志として生徒が活動に参加している。

教育長

- 賀茂地域では首長が縦の連携に関心を持っている中で、教員間の連携を図るための仕組みづくりについて、工夫していることや具体的なイメージがあれば教えていただきたい。

松崎高校

- 今年度から、町教育委員会の主催により、町内の教職員が校種を超えて一同に会し、様々な体験活動等を通して町の教育について考える「先生大集合」の取組が始まった。また、中高連携の取組として、交流授業を通して高校の教員が定期的に中学校で授業を行っている。
- 以前は町内に住んでいる教員が多く、普段から交流があったようだが、最近は町外から通う教員も多いため、まずは地域のことを知る必要がある。そのため、Google チャット

で各学校の活動の様子を共有したり、合同で教員の研修を実施している。

教育委員

- 教員同士の交流はこれから広がっていくと思うが、生徒が主体となって連携するものもあるのか。

松崎高校

- 昨年は生徒会の執行部が中心となって小学生を招き、小中高合同でスポーツ交流会を開いた。生徒が町教育委員会に企画書を持ち込んで説明するなど、実現するために試行錯誤を繰り返しながら主体的に取り組んでいた。当日は、賀茂地域では人口減少が進んでおり若者が中心となって活性化していく必要があることを、生徒会長が説明した。
- 昨年は、生徒主体の取組を多く実施した。コロナの影響で体験入学が開催できなかったこともあり、中学生に入学してほしいとの思いから、気軽に立ち寄ってもらうことをコンセプトに中学生を招き、勉強会を開催した。熊本県で台風の被害があった際には、生徒自身で有志を集め、賀茂地域で募金活動を行った。学校としては、生徒の取組が次に繋がるよう後押しをしている。
- スポーツ交流会や勉強会は、生徒から生まれたアイデアである。中高交流事業の一環で、交流委員会が中心となり部活動交流を行っている。

教育委員

- 各コースにおいて生徒数はどのように推移しているか。また、新たなコースを開設する計画はあるか。

松崎高校

- 特進コースの生徒は減少しているが、総合・進学コースは増加している。美術コースはあまり変化が見られない。新たなコース開設の計画はないが、コースの在り方については職員間で検討している。

教育委員

- 中高の連携体制に関して、保護者はどのように考えているのか。

松崎高校

- 連携している中学校の生徒に対しては、本校への進学をアピールしているが、保護者としては子どもの意向を優先したいという思いが強い。生徒の意向は、進学を目指すのであれば下田高校、という考えが根付いている印象がある。また、幼少期から同じ人間関係の中で過ごしているため、人間関係を基準に学校を選ぶ生徒もいるようである。

教育委員

- 不登校の生徒はいないとのことだが、何か特別な取組があれば教えていただきたい。また、いじめの問題はあるか。

松崎高校

- 子どもの頃から同じ人間関係が続く状況には課題を感じている。この地域にはフリースクールや子どもの居場所づくりに取り組むNPO団体がなく、明らかにリソース不足で

ある。そのため、生徒にとって学校が重要な居場所にならなければならない、学校や教員が担う役割は非常に大きい

- 本校には、多種多様な生徒が在籍している。生徒が学校に適応できるよう、教員は一人一人に時間を割いて向き合っている。学校全体の取組としては、学校適応感を測るアセス（学校環境適応感尺度）を活用し、生徒と担任との年2回の面談のほか、5月と10月に「1分間カウンセリング」として生徒と生徒指導担当が面談し、生徒の悩みを聞いたり相談しやすい人に繋いでいる。また、アセスの結果に基づき生徒に声掛けやアプローチを行っている。
- 不登校については、人間関係づくりプログラムやソーシャル・エモーショナル・ラーニング、ソーシャルスキルトレーニング等により、人間関係の築き方をスキルとして捉え、1年生に対して授業と合わせて学習を実施している。
- アンケートにより、今年度はいじめの疑いがある訴えが3件発覚した。すぐにいじめ検討委員会を開いて学校全体で共有、対応し、現在は解決している。

教育委員

- 教職員の労働環境はどのように変化しているか。

松崎高校

- 若い職員が多く、初めて担任や部活動の正顧問に就く教員もおり、仕事の処理や優先順位づけが不慣れで指導が必要なケースも散見される。
- コース制で教科によって教科書が異なることや、その分テストも作らなければならない等、特色化を図ることが教員の負担増加に繋がっている。

教育委員

- 教員に対してはどのような支援が必要と考えているか。

松崎高校

- 特進コースでは朝、放課後、長期休暇中に補講があり、これが大きな業務になっているが、町からサテライト授業について提案があり、主に3年生の受験期での活用を検討しているところである。これは生徒にとっても、教員の働き方の点でもプラスになる。

才徳兼備の人づくり小委員会委員

- 西豆地区連携型中高一貫教育連絡協議会は、どのように運営されているのか。また、西豆学やカリキュラムとの関わり、西伊豆町との連携によるカリキュラムの開発等についてもお聞きしたい。
- 学校運営協議会では、人間関係の固定化や人口減少等の課題について議論しているか。
- 南伊豆町の生徒が増えているとの説明があったが、南伊豆町は中高連携の体制に含まれていない。これに関して、連携校と比較して情報共有や特性を抱えた生徒へのケア等において課題があればお聞きしたい。

松崎高校

- 中高の校長、副校長、教頭、教務主任、中高一貫担当が集まり、年間の計画や企画、反

省等を話し合う推進会議が年3回開かれている。

- 教員が属する組織として、中高の生徒の学力をいかに向上させるかを話し合う学力向上委員会、生徒の人間関係に関して情報や意見を交換する生徒指導委員会、生徒同士の部活動や行事での交流を推進する生徒交流委員会、総合的な探究の時間において、地域について何を学びどのように貢献できるかを中高で検討する「西豆学」委員会がある。
- 学校運営協議会は年3回ほど開催しており、生徒が抱える悩みや教職員の働き方について意見交換を行っている。町長も委員としてメンバーに入っている。
- 郷土発展に貢献する人材の育成プログラムとして、体験学習や合同発表会、合同進路ガイダンス等、主に行事単位で西伊豆町と交流を図っている。カリキュラムの開発に関しては、現在「西豆学」委員会で検討しているところである。
- 南伊豆町の生徒がこれほど増えたのは、今年度が初めてである。教職員だけでなく生徒も、賀茂地域が抱える課題は、西伊豆、南伊豆それぞれの地域で取り組むのではなく、地域全体で協力していかなければならないという認識を持っている。地域全体で協力することにより良い反応が起きることを期待している。

才徳兼備の人づくり小委員会委員

- 松崎高校を卒業し進学する生徒の大半は町外に転出していると思うが、就職時に松崎町に戻ってくる生徒の割合を把握していれば教えていただきたい。

松崎高校

- 割合までは把握していないが、戻ってくる生徒の少なさは問題視している。例えばインターンシップは、特定の企業で体験をするものであるため、地域について広く知ることが難しい。そのため、様々な企業を学校に呼び、ブース形式で生徒が企業から説明を受ける行事を企画している。そのような体制が整えば、いずれこの地域で就職したい、新しいことに挑戦したいと考える生徒が増えてくると考えている。

才徳兼備の人づくり小委員会委員

- 企業体験プログラムのように、地域のことを知った上で、自分で商売を興していく機会が増えるとよいのではないかと。

教育委員

- 南伊豆地域の高校間で連携しているものはあるか。
- 各学校でそれぞれの地域課題の研究に取り組んでいるのであれば、それをディスカッションできる場があるとよい。

松崎高校

- 企業体験プログラムやサマースクールで他校の生徒に会う機会はあるが、行事や授業の日を合わせて実施はしていない。今後サテライトの導入が進めば、どこかが拠点になり授業や部活動における交流が起ころうと考えている。
- 県内では西伊豆町の高齢化率が最も高く、2位は川根本町だが、10位までは全て賀茂地域の市町である。少子化や人口流出のほか、最近は耕作放棄地も増えているため、松崎

2030 プロジェクトで課題にしている。町や地域の方々と協力しながら、高校生の力をどのように生かすか考えていきたい。

教育委員

- 卒業後に進学や就職で転出する生徒を囲い込むのではなく、行政がどのように将来像を構築し、いかに魅力的な地域づくりができるかが重要である。これが実現できれば、地域に人が戻ってくる。

教育長

- まちづくりを考える上で、この地区に高校があることは重要なポイントである。先日の地域協議会では、幼小中高の縦の連携及び地域との横の連携や、人を呼び込むアイデアについて言及されており、学校の複合施設化が進んでいる。
- 2050 年を担うのは今の高校生であり、町の将来像を描くにあたり、高校生が考える地域の将来像は重要な出発点となる。彼らの思いやビジョンを結び付けていくことで、将来像にリアリティが生まれる。そのためには、高校が生徒の思いと行政のビジョンとを繋げる重要な役割を果たすと考えている。

教育委員

- 自分が思い描く将来のために何をすべきか、高校生が考えるための教育が必要である。それを積み重ねていくことが、将来像の実現に繋がるのではないかと。学校だけでなく、生徒自身も工夫して考えることが必要不可欠な時代になってきた。

才徳兼備の人づくり小委員会委員

- 中山間部の学校ではリソース不足が問題となっている中で、生徒を支えるためにどのような工夫をしているのかお聞きしたい。

松崎高校

- 悩みを抱えた生徒が相談できる機関は遠方かつ数も少ないため、気軽に受診できる環境ではない。学校医に心療内科や精神科の医師を設置できるとスムーズな対応ができるのではないかと。

才徳兼備の人づくり小委員会委員

- 他県では精神科医が学校医に就いている事例もある。特別支援学校では医療的ケアが必要な子どももおり、そのような子どものケアを考えることは大事だと思う。

教育委員

- 必要な医療の体制について、事務局でも検討をお願いしたい。
- 南伊豆町では、東京都杉並区と高齢者福祉に関する連携協定を結んでいると聞いた。協定の仕組みを利用し、杉並区とこの地域の学校とで連携や交流ができないか。異なる社会や環境、文化を知る機会を多く設けることが、課題である人間関係の固定化への対策になり得る。